



# ふじさき検定 公式テキスト

藤崎町

平成 29 年 11 月 30 日 改正

# 目次

1. 藤崎町の概要 .....	1
○地名の由来 .....	1
○町の地勢(位置・面積・人口・気候).....	1
○沿革.....	2
○地域指定 .....	2
○行政区域面積 .....	2
○町章.....	2
○町の花・木・鳥(2015年(平成27年)3月28日制定).....	2
○友好都市 .....	3
○町民憲章 .....	4
2. まつり.....	6
○国際交流凧フェスタ in ふじ崎 .....	6
○ふじワングランプリ.....	6
○ねぷた合同運行 .....	7
○ながしこ合同運行.....	7
○津軽花火大会(灯籠流し).....	7
○常盤八幡宮年縄奉納行事.....	8
○ふじさき秋まつり.....	8
○その他のまつり .....	10
【リンゴとチューリップのフェスティバル】.....	10
【フジロックフェスタ!】.....	10
【なべワン - グランプリ in 停車場通り】.....	10
3. 歴史 .....	11
○町のあゆみ .....	11
■旧藤崎町 .....	11
■旧常盤村 .....	12
■新藤崎町 .....	12
4. 名勝・史跡 .....	13
○藤崎城址 .....	13
○唐糸御前史城公園 .....	14
○鷹待場跡 .....	15
○農林省試験場東北支場跡.....	16
○ふじのふるさと記念広場(旧農林省園芸試験場東北支場「ガラス温室」).....	16
○藤崎八幡宮 .....	17
○鹿嶋神社 .....	17

○ <sup>はき</sup> 壇神社	18
○徳下八幡宮・イチイの古木	19
○福島遺跡(十川端村跡・稲荷神社跡碑)	20
○赤沼	20
○矢沢正八幡宮	20
○水木城址	21
○水木熊野宮	21
○五輪盛	21
○常盤八幡宮	22
○日本キリスト教団藤崎教会	22
5. 自然・景色	23
○ふじ原木公園	23
○白鳥ふれあい広場(ライフコート平川白鳥広場)	24
■白鳥観察施設『こーやまるくん』	24
○みずべの学習ひろば	24
6. 施設	25
○藤崎町文化センター	25
○常盤生涯学習文化会館	25
○ふれあいずーむ館	25
○常盤ふるさと資料館あすか	26
○スポーツプラザ藤崎	26
○スポーツプラザときわ	26
○藤崎町農業者トレーニングセンター	27
○藤崎町コミュニティプラザぼっぼら	27
○農産物直売施設 JA つがる ふじの里	27
○食彩ときわ館	28
○弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター(藤崎農場)	28
7. 食	29
○藤崎町の特産品	29
■りんご「ふじ」	29
■米	29
■ときわにんにく	30
■トマト、トマトジュース	30
■アスパラガス	30
■トキワの赤いたまご	30
○菓子、スイーツ、パン	31

■米粉パン .....	31
■ジャム[青森りんご加工株式会社(ARK)] .....	31
■藤崎スイーツ .....	31
8. 農業 .....	32
○りんご「ふじ」発祥の地 .....	32
◎ふじ .....	34
◎ <sup>くれない</sup> 紅 <sup>ゆめ</sup> の夢 .....	35
◎こうこう .....	36
○畜産業 .....	37
○藤崎町の米づくり .....	37
◎なまず米 .....	37
◎ <sup>せいてん</sup> 青天 <sup>へきれき</sup> の霹靂 .....	38
9. 文化・芸術 .....	39
○ <sup>たかぎ</sup> 高木 <sup>しろう</sup> 志朗 .....	39
○ <sup>のぶひら</sup> 平 <sup>じん</sup> 仁 ( <sup>みずたに</sup> 水谷 <sup>つよし</sup> 毅 ) .....	39
○菊様の舞／松助踊り .....	40
○獅子踊り .....	40
10. 工芸品 .....	41
○ひば曲げもの .....	41
○津軽塗 .....	41
11. スポーツ .....	42
○チャレンジデー .....	42
○大ノ里杯少年相撲大会 .....	42
12. ゆかりの有名人 .....	43
○ <sup>あさり</sup> 浅利 <sup>たかし</sup> 崇 .....	43
○ <sup>おおのさと</sup> 大ノ里 .....	43
○マスコットキャラクター .....	44
○ <sup>うめざわ</sup> 梅沢 <sup>とみお</sup> 富美男(ふじりんごふるさと応援大使) .....	44
13. 藤崎町 MAP .....	45
参考文献 .....	50

# 1. 藤崎町の概要

## ○地名の由来

「藤崎」という地名は、平安時代初めころの伝説が始まりではないかと言われています。もともとは「沼洲村」と呼ばれており、早くから蝦夷などの先住民族が住み開拓されていました。所々に湖や沼があり、そのあたりは深い林で、魚や貝、水鳥が多く住み、西側を大きな川が流れて肥えた土地に恵まれていました。

桓武天皇時代の793年(延暦12年)、京都から坂上田村麻呂という武将が、貢物をしない蝦夷地の人たちを京都の中央政府に従わせようと、たくさんの軍勢を引き連れて遠征してきました。いわゆる「蝦夷討伐」です。

田村麻呂将軍は蝦夷の頭領であった高丸を討ち取り、兵を率いて当時の沼洲村に着きました。雁泊という所のほとりになると、高丸の悪霊が水底に現れ、田村麻呂将軍に復讐しようとしてきました。将軍は剣をぬいて切り払い悪霊を退治し、このことを記念して神社を建てることにしました。そして、近くの深い林に分け入り、持っていた藤の鞭を地面に突き立て、その目印にしました。後に、その藤の鞭から根が出て、やがて見事な薄紫の花を咲かせるようになりました。そこには毎年美しい花が雲のように咲くため、付近を「藤の咲く里“藤咲村”」と呼ぶようになり、そして「咲」の字が後に「先」と変化し、やがて現在の「崎」の字が使われるようになり「藤崎」となったと言われています。

このようにして建てられた神社が毘沙門宮、現在の鹿嶋神社となっています。

## ○町の地勢（位置・面積・人口・気候）

藤崎町は、青森県津軽平野のほぼ中央に位置し、東は青森市・黒石市、西は弘前市、北は板柳町、南は田舎館村に接しています。町中心部から県都青森市まで約25キロメートル、弘前市まで約9キロメートルの距離にあります。総面積は37.29平方キロメートルで、町域には山岳・原野がなく、地質は第4紀沖積層に属する、農業に適した肥沃な土壤に恵まれています。平成22年の国勢調査では、藤崎町の人口は16,021人、世帯数は4,910世帯となっています。

気候は、津軽平野の中では比較的温暖で、水と緑に囲まれた豊かな自然が四季折々に彩りを添えるなど、変化に富んでいます。

## ○沿革

明治 22 年(1889 年)4 月 1 日	合併	藤崎村 葛野村 藤越村
大正 12 年(1923 年)5 月 20 日	町制施行	藤崎村から藤崎町となる
昭和 29 年(1954 年)5 月 3 日	合併	常盤村 富木館村
昭和 30 年(1955 年)2 月 1 日	合併	藤崎町 十二里村
平成 17 年(2005 年)3 月 28 日	合併	藤崎町 常盤村
平成 19 年(2007 年)9 月 1 日	境界変更	青森市浪岡大字増館の一部 青森市浪岡大字郷山前の一部 青森市浪岡大字吉野田の一部

## ○地域指定

- ・都市計画区域
- ・農村地域工業等導入促進地区

## ○行政区域面積

37.29 km<sup>2</sup>

## ○町章

藤崎町のふじのりんごと白鳥、常盤村の稲穂をシンボライズ。白鳥と稲穂で「藤崎」の頭文字のFを表現しています。赤は、りんごとこれから新しい町としての町民の情熱を表現し、黄色は、稲穂と平和への願いを表現し、藤色は、白鳥の高貴なイメージと誇り高い町をイメージしています。

町章デザイン公募 120 点の中から、青森市在住の石澤朝夫さんのデザインが選定されました。



## ○町の花・木・鳥（2015 年（平成 27 年）3 月 28 日制定）

町の花 藤

町の木 りんご「ふじ」

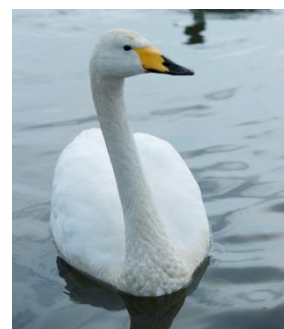
町の鳥 白鳥



◎藤の花



◎りんご「ふじ」



◎白鳥

## ○友好都市

### **岩手県田野畑村(2015年(平成27年)4月29日締結)**

岩手県田野畑村との交流は、2011年(平成23年)、東日本大震災で津波被害を受けた岩手県田野畑村の子どもたちを励まそうと藤崎町のねふた合同運行に招いたことからスタート。以来、毎年夏に子どもたちの行き来をしているほか、復興支援に町職員を派遣したり、文化活動においても交流が広がっています。

### **岩手県田野畑村について**

岩手県沿岸北部に位置する田野畑村は、南と西側は岩泉町に、北側が普代村に接し、東は太平洋に面しています。東西に約17km、南北に14kmほどあり、面積は156km<sup>2</sup>余りです。

東経141度53分、北緯39度56分の位置にあります。

西部と中央部は、北上山地から続くなだらかな山々がつくるのどかな風景が広がり、東部の海岸線は、“海のアルプス”とも呼ばれる、隆起海岸がつくる豪壮な断崖となっています。大部分が山林で、平地はわずか16%程度の山間の地形です。夏は「ヤマセ」や親潮の影響を受け冷涼、冬は太平洋型の気候で寒い中にも日照に恵まれています。

水産業と酪農が盛んで、三陸漁場を間近に望む水産業ではワカメやコンブの養殖と、鮭やアワビ、ウニなどの捕獲を。また、豊かな自然と地形を活かした酪農では、人間と地球にやさしい農業を目指しながら、高品質の牛乳や乳製品をつくっています。

## ○町民憲章

### 藤崎町民憲章

私たちは、津軽平野の中央に居住し、霊峰岩木山を望み、自然の恵み豊かなまちに育てられた藤崎町民です。

郷土に誇りを持ち、「みんなで創る 心豊かな 優しいまち」の実現をめざし、藤崎町の限りのない発展に願いをこめて、この憲章を定めます。

- 一. 私たちは、緑や水や土を大切にし、美しいまちをつくります。
- 一. 私たちは、すこやかな心と体をはぐくみ、元気なまちをつくります。
- 一. 私たちは、働ける喜びと誇りを持ち、未来につなげる豊かなまちをつくります。
- 一. 私たちは、きまりを守り、家族や隣人を愛し、明るいまちをつくります。
- 一. 私たちは、歴史と伝統を大切にし、常に学び、文化の香り高いまちをつくります。

私たちは、この憲章を道しるべとして、豊かなまちづくりに、たくましく前進します。

そして、このまちを愛します。

平成 19 年 12 月 5 日制定

### 【町民憲章の解説】

全体の構成としては、前文とこれを受けての 5 つの項目からなる本文とそれを実践するめあてとする後文の 3 段構成としている。

本文の文体については、文末を「・・・まちをつくります。」とし、町民の立場での強い決意を表現している。

#### ◎前文について

藤崎町の地理的な特徴と町民憲章を制定する意義と町民の決意を表現している。

#### ◎本文について(5項目の上から順に)

##### 自然・環境

藤崎町民が自然の恵み豊かなこのまちを大切にし、人と自然が調和しあつた、美しいまちにしたいという願いを込めている。

##### 健康・体育

藤崎町民が心身を鍛え、いきいきと活力みなぎる元気なまちにしたいという願いを込めている。

#### 勤労・産業

藤崎町民が働くことに喜びと誇りを持ち、地域の産業を育て、限りなく発展を続けるまちにしたいという願いを込めている。

#### 安心・安全

藤崎町民がきまりを守り、互いに助け合いながら、家族や地域の絆を深め、明るいまちにしたいという願いを込めている。

#### 教育・文化・歴史

藤崎町民が町の歴史と伝統を大切にし、教養を高め、情操を養い、地域の文化の活動にも積極的に参加し合い、文化の香るまちにしたいという願いを込めている。

#### ◎後文について

藤崎町民一人ひとりが五つの項目からなる本文を道しるべとして行動・実行して、私たちの「藤崎町」を愛しつづける決意を表現している。

## 2. まつり

### ○国際交流凧フェスタ in ふじ崎

陸上自衛隊第9音楽隊の演奏による「ふれあいコンサート」や、留学生との交流パーティー、アメリカから招いたカイトマスターとの凧の制作等、国際交流を目的として毎年恒例で行っています。メインイベントの国際交流凧揚げ大会は、ライフコート平川において行われ、世界の珍しい凧がたくさん揚がり、目を楽しませてくれます。

期日：4月下旬

場所：ライフコート平川ほか



### ○ふじワングランプリ

“食”の新しい名物づくりとそのPRを目的とした食のイベントです。各店が趣向を凝らし、藤崎町の特産品を使ったオリジナルグルメ商品を持ち寄って販売し、その人気を競います。グランプリは商品を購入した来場者による人気投票によって決定します。イベントではご当地キャラクターショーやパフォーマンスステージも行われ、大いに賑わいを見せています。

期日：6月下旬

場所：食彩ときわ館



### ★ふじワングランプリ 歴代グランプリ受賞

2012年(平成24年)	トキワ卵のぷりん	きくち覚誠堂
2013年(平成25年)	アスパラ☆海老マヨ	幡龍藤崎店
2014年(平成26年)	お好み焼きそば	兵藤酒店
2015年(平成27年)	トキワ養鶏『こめ豚』のモツ鍋(丸鶏使用)	常盤村養鶏農協
2016年(平成28年)	温泉たまご付き『こめ豚』のモツ鍋	トキワ養鶏
2017年(平成29年)	みそカレーもつ鍋	トキワ養鶏

## ○ねぶた合同運行

各町内会による扇ねぶた、約 10 台が運行します。観客との距離も近く、気軽に声を掛け合うリラックスモードが漂います。藤崎ねぶたの囃子のかげ声は、弘前市、黒石市や青森市の掛け声が入り混じっていて、藤崎町ならではのスタイルを確立しています。

期日：8 月上旬



## ○ながしこ合同運行

藤崎町独特の七夕行事で、1923 年(大正 12 年)の町制施行を記念して始められました。戦中は行われませんでした。1967 年(昭和 42 年)の公民館創立 20 周年を記念して復活し、現在も各町内や団体から趣向を凝らした山車が町を練り歩きます。「ながしこ」の山車は、人間がポーズを作って台車に乗る「生き人形」が特徴で県内でも大変珍しい行事です。

期日：8 月上旬

場所：藤崎町役場周辺

## ○津軽花火大会（灯籠流し）

平川河川敷にある白鳥ふれあい広場を会場に、夏の思い出を込めて流される幻想的な灯籠流しの後、約 4,000 発もの花火が打ち上げられます。色とりどりの大輪の花が津軽平野の夜空を焦がします。

華やかさの中に感傷的な趣が潜む、中南津軽で最大規模の伝統のある花火大会です。

期日：8 月 20 日

場所：藤崎町平川河畔(白鳥ふれあい広場)



## ○常盤八幡宮年縄奉納行事

元旦に、長さ4.4メートル、幅2.3メートル、重さ400キログラム以上にもなる巨大な年縄を奉納し、新年の五穀豊穡や家内安全を祈願する常盤地区に伝わる伝統行事です。厳寒の中、水ごりをして身を清めた締め込み一本の男衆が年縄や福俵を担ぎ、「サイギサイギ」のかけ声を町内に響かせながら常盤八幡宮を目指します。この神聖な行事は、江戸時代、1664年(寛文4年)から続くとされ、約350年の歴史を誇ります。



期日:1月1日

場所:藤崎町年縄伝承館→常盤町内→常盤八幡宮

## ○ふじさき秋まつり

町の二大特産品である「米」と「りんご」の収穫感謝や文化芸能発表、町民の健康づくりをテーマとして、11月に開催される秋の祭典です。「青天の霹靂」を使って挑戦する「ジャンボおにぎりづくり」や、りんご「ふじ」のPRイベントとして「ジャンボアップルパイづくり」など、様々な催しで会場を盛り上げます。ジャンボアップルパイは、2017年(平成29年)に、りんごの提供、シロップ漬け・パイ生地などのジャンボアップルパイづくりの材料がすべて藤崎町産を実現しました。

期日:11月下旬



ジャンボアップルパイづくり



ジャンボおにぎりづくり

## ★「ジャンボおにぎり」挑戦の歴史

旧常盤村において、村の産業・文化を広く社会に紹介し、村民が健康でいきいきした村づくりを目指すため、平成元年度から「ときわいきいきまつり」を実施。村の特産品が米であったことから、同まつりのメインイベントとして「日本一の大きさのおにぎり」に挑戦したのがはじまりです。

町村合併後も秋まつりのシンボルとして、ジャンボおにぎりづくりを継続しています。

【ジャンボおにぎりの推移】

	使用した米の量	成否	備考
平成元年（1989年）	14俵3斗3升	×	高さ1.95m、幅2.3m、奥行1.8m。「むつかおり」を使用。ジャンボおにぎりが18秒で崩れる。
平成2年（1990年）	16俵3斗3升	×	高さ2m。ジャンボおにぎりは崩れる。
平成3年（1991年）	-	-	台風19号災害のため、いきいきまつりを中止。
平成4年（1992年）	16俵6升	○	高さ2m。ジャンボおにぎりが初めて崩れなかった。
平成5年（1993年）	-	-	冷害のためジャンボおにぎりづくりを中止。代わりに巨大たまご焼きに挑戦、完成。（鶏卵1,002個使用。長さ1.8m四方、厚さ20cm、重さ80kg）
平成6年（1994年）	11俵	○	
平成7年（1995年）	11俵	○	たまごピラミッド(6,625個使用)
平成8年（1996年）	11俵	○	高さ2m、幅1.8m、奥行1.5m
平成9年（1997年）	14俵1斗	○	高さ2.1m、幅1.8m
平成10年（1998年）	20俵	×	第10回目を記念して、過去最大のおにぎりに挑戦。木枠が大き過ぎて、米が足りなくなったため、台形型のおにぎりになった。
平成11年（1999年）	9俵	○	
平成12年（2000年）	9.5俵	○	
平成13年（2001年）	9.5俵	○	
平成14年（2002年）	15俵	○	高さ2.2m。
平成15年（2003年）	15俵	○	
平成16年（2004年）	22俵	○	高さ1.8m。
平成17年（2005年）	20俵	○	
平成18年（2006年）	20俵	○	
平成19年（2007年）	20俵	○	
平成20年（2008年）	20俵	×	木枠をはずした瞬間崩れた。
平成21年（2009年）	-	-	おにぎりピラミッド(高さ2.2m、おにぎり約1,500個) りんごピラミッド(りんご230個) にんにくピラミッド(にんにく250個)
平成22年（2010年）	10俵	○	高さ1.8m。
平成23年（2011年）	10俵	○	高さ1.8m。
平成24年（2012年）	10俵	○	高さ1.5m。
平成25年（2013年）	10俵	○	高さ1.8m、幅・奥行き2.1m、おにぎり12,000個(6,000食)配布。
平成26年（2014年）	10俵	○	「つがるロマン」を使用。
平成27年（2015年）	10俵	○	「青天の霹靂」を使用。
平成28年（2016年）	10俵	○	おにぎり10,000個(5,000食)配布
平成29年（2017年）	10俵	○	おにぎり10,000個(5,000食)配布

## ○その他のまつり

### 【リンゴとチューリップのフェスティバル】

弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター藤崎農場にて、2004年より「リンゴとチューリップのフェスティバル」を開催しています。チューリップ園では、学生実習で植えつけた16種類13,000球のチューリップの花を、菜の花と共にお楽しみいただけます。教育研究用のリンゴ園では、57品種1,200本のりんごの花を楽しむことができます。

期日：5月上旬

場所：弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 藤崎農場

### 【フジロックフェスタ！】

地域活性化を目的に「藤崎をロックに奮わす会」が主催し、藤崎町文化センター大ホールをメインに2012年(平成24年)より開催しています。イベントには地元パフォーマーが多数参加し、藤崎町から音楽などのパフォーマンスを発信する地域のエンターテインメントイベントとなっています。

期日：8月下旬～9月上旬頃

場所：藤崎町文化センター大ホール 他

### 【なべワン-グランプリ in 停車場通り】

藤崎駅通り商店街を会場に各店が趣向を凝らした自慢の鍋を販売し、来場者が投票してナンバーワンの鍋汁を決めるイベントです。2010年(平成22年)より開催されています。会場には生キャラクターのお鍋御前も登場し、イベントを盛り上げています。

期日：2月中旬

場所：藤崎駅通り商店街

### ★なべワン-グランプリ 歴代グランプリ受賞

第1回	2010年(平成22年)	かに鍋	きくち覚誠堂
第2回	2011年(平成23年)	すいとん	藤崎町商工会女性部
第3回	2012年(平成24年)	もつけの汁	藤崎町商工会青年部
第4回	2013年(平成25年)	塩こうじ鍋	花形モータース
第5回	2014年(平成26年)	アンペ鍋	藤崎町商工会女性部
第6回	2015年(平成27年)	塩こうじ鍋 2015	花形モータース
第7回	2016年(平成28年)	宇宙人鍋	藤崎中央小・親の会
第8回	2017年(平成29年)	牛すじ煮込み鍋	そばの矢車

### 3. 歴史

#### ○町のあゆみ

##### ■旧藤崎町

旧藤崎町は津軽で最も早くに開けた土地であり、縄文晩期の土器などが発掘されていることから、先史時代から人が住んでいたものと考えられます。

前九年の役(1051年)で、源頼義・義家を棟梁とする軍勢が、奥州の豪族・安倍氏を討ち、破れた安倍貞任の遺児・高星丸(たかあきまる)が藤崎に落ち延びて、のちの藤崎城を築き、安東氏を興したと伝えられていることから、藤崎は「津軽の歴史の発祥地」と言われています。

安東氏は鎌倉時代、岩木川水上の要衝、肥沃な土地を誇る藤崎を拠点に勢力を拡大、十三湖に進出し、強靱な水軍と船団を背景に日本海を雄飛し、北奥州の覇者として君臨しました。藤崎では、鎌倉との往来を偲ばせる「唐糸御前の伝説」や、南北朝時代のものと推定される6基の板碑が見つかっており、鎌倉の影響を受けて、文化的に高い水準に達していたと考えられます。

15世紀半ば、南部氏の進出により安東氏が津軽から退去した後は、南部氏の支配するところとなり、16世紀終わりの津軽(大浦)氏台頭以後は、藩政時代を通じてその支配するところとなりました。江戸時代は、藤崎組の首村として、代官所・鷹待場(幕府などに献上する鷹を捕獲する場所)・御蔵(米穀の集積と積み出しの基地)・伝馬(物資や文書の輸送基地)など、重要な公共施設が設けられていました。

1889年(明治22年)「市制及び町村制」が施行され、藤崎村・藤越村・葛野村が合併した藤崎村となり、その後1923年(大正12年)に町制を施行し、藤崎町となりました。

一方で1889年(明治22年)、中島村・小畑村・矢沢村・水沼村・中野目村・五林村・西中野目村・吉向村・亀岡村・俵<sup>たわら</sup>村・下俵<sup>しもたわら</sup>村・柏木<sup>かしわぎ</sup>堰村が合併し、十二里村となりました。

1955年(昭和30年)に藤崎町と十二里村が対等合併し、翌1956年(昭和31年)に林崎が板柳町から分離合併したことで、旧藤崎町となりました。

## ■旧常盤村

旧常盤村は鎌倉時代には北条氏の御内人として蝦夷沙汰代官職えぞのさただい官職となり、室町時代には京都御扶持衆きょうとごしゆうに組み入れられたとされる津軽の豪族である安東氏や、南朝の北畠氏ゆかりの武将の館跡に由来する地名が残されています。鎌倉時代には久井名館は十川と浪岡川の間(現在、津軽市)に囲まれた高台に館が築かれていた(常盤村誌)とされ、福館も中世の安東時代に築かれた砦から名付けられたものといえます。水木は津軽郡中名字(天文年間 1532 年～55 年)に「溝城(みぞき)」とあり、現在の古館にある熊野宮は館神として勧請されたと伝えられています。平城の館跡で、郭内は南北 250 メートル、東西 200 メートルで周囲に水堀跡があり、現在でも堀、土塁が残っています。同じ津軽郡中名字には十川端の地名(現在の福島地区)もみえています。このように、早くから豊かな米作地帯として拓かれていました。藩政時代は津軽藩領、津軽郡田舎荘に属していました。

1889 年(明治 22 年)市町村制施行により、常盤村、富木館村となり、1924 年(大正 13 年)には、奥羽本線(弘前から青森間)に村民の念願だった「北常盤駅」の開業が実現しました。また、常盤運送株式会社の創業により、米・りんごの農産物に加え、わら工品の輸送が活発化し、村民の日常生活に多大な成果をもたらすとともに、産業振興の発展に大きく寄与しました。

そして、1954 年(昭和 29 年)、県下合併第 1 号として常盤村、富木館村が合併し、さらに 1955 年(昭和 30 年)、隣村田舎館村の三ツ屋地区の一部を編入して旧常盤村となりました。

## ■新藤崎町

新藤崎町は、旧藤崎町と旧常盤村が 2005 年(平成 17 年)3 月 28 日に対等合併して、県内最小面積の町として誕生しました。新町では恵まれた立地条件を活かし、それぞれの町村が取り組んできたまちづくりの成果を引き継ぎ、今後さらに発展・飛躍するため、新しいまちづくりを推進しています。

## 4. 名勝・史跡

### ○藤崎城址

藤崎城の築城は、1092年(寛治6年)とも1082年(永保2年)ともいわれています。藤崎城は、安東氏が南部氏に追われた後も城としての機能を保ち続け、南部氏の津軽支配の拠点となり、南部氏が津軽から撤退した後は、津軽為信のものとなって、為信の縁者が住みました。藤崎城が廃止されたのは天正年間とされており、築城から500年余り「城」として使用されていたこととなります。



藤崎城址の特徴としては、非常に大きな外郭(土塁や堀があり、下級の家来や一般民衆が住むところ)が形成されていること、平川と浅瀬石川の合流点近くの河岸段丘に位置していることなどがあげられています。廃止された後、藤崎城は建物が取り壊され、江戸時代を通じて、堀の跡は水田の苗代として使われ、土塁や建物のあった場所などは畑となり、地形はそのまま残されました。

戦後の昭和30年代に入ってから、市街地の発展や国道7号線バイパスの建設拡張などもあり、現在は、堀跡や土塁跡などのわずかな遺構が残っています。

所在地：藤崎町大字藤崎字四本松字武元

### 安東氏発祥の地

平安時代末の11世紀の中頃、岩手県盛岡市のあたりに本拠地を構えていた東北地方の大豪族に「安倍氏」がいました。その安倍氏を京都政権の派遣軍が討ち滅ぼし、源氏が関東や奥州に勢力を張るきっかけとなった戦いが「前九年の役」(1052年～1062年にわたる長い戦い)です。その戦いで戦死した安倍氏の頭領・安倍貞任の遺児の高星丸が藤崎に落ち延び、成人の後に安東氏を興し、藤崎城を築いて本拠地とし、大いに栄えたと伝えられています。



## ○唐糸御前史城公園

唐糸御前史跡公園は、藤崎町の西側にあり、鎌倉時代の「北条時頼の回国伝説」にまつわる「唐糸御前の伝説」を今に伝える史跡公園です。

1993年(平成5年)、この伝説の地に「唐糸御前史跡公園」が完成しました。史跡公園は、岩木山を眺望するりんご園の中にあり、総面積3960平方メートル余り、駐車場・トイレ・池・唐糸御前のブロンズ・花壇・藤棚・四阿等があるほか、南側の一面の史跡の部分には1359年(延文4年)の板碑、五輪塔、センの古木、各種の石碑などがあります。

公園から西側に見える巨大な松のある「藤崎町斎場」が、唐糸御前が庇護を受け御前の死後その菩提を弔ったとされる平等教院(後に霊台寺・護国寺・満蔵寺と名を変え、鎌倉文化が津軽に伝播される時のセンター的な役割を果たしたのではないかとされる寺院)、後に弘前の長勝寺ちやうしょうじかまら構が造られた時に移された「満蔵寺」の跡です。

所在地：藤崎町大字藤崎字二本柳 37



## 唐糸御前の伝説

「唐糸御前の伝説」は、鎌倉の五代執権・北条時頼に愛された女性「唐糸御前」の悲しい伝説です。唐糸御前は、鎌倉の執権・北条時頼に仕える、心根の優しい才色兼備の女性で、やがて時頼の愛を一身に集めるようになりましたが、周囲の女性の妬みを受けることとなり、鎌倉を逃れ生まれ故郷の津軽の藤崎に隠れ暮らしていました。時頼は、病で執権職を退いた後、仏門に入り諸国行脚の旅に出ました。そしてやがて津軽を訪れることになり、唐糸御前は一瞬胸をときめかせましたが、田舎に落ちぶれ見る影もなくやつれた自らの姿を悲しみ、近くの柳の池に身を投じて、はかない生涯を閉じました。村人たちが唐糸御前の死を泣き悲しんでいるおり、北条時頼がこの地を訪れて唐糸御前の死を深く悲しみ、唐糸御前が通っていた平等教院という寺院に墓を営みました。そして鎌倉に帰る道すがら七日ごとに寺を建立しました。今もその史跡を秋田県各地にたどることができます。

(一七日山…大館市釈迦内の実相寺、二七日山…秋田市内の釈迦堂光明寺、三七日山…西木村堂村の大国主神社)



## ○鷹待場跡

江戸時代の頃、幕府の要人や藩主など上級武士の権力の象徴とも言うべきものの一つに、「鷹狩」<sup>たかがり</sup>がありました。そして、鷹待場・鷹待<sup>たかまち</sup>というのは、その鷹狩用の鷹を捕らえるための場所・施設のことです。

津軽は鷹の名産地として全国に知られており、やがて津軽藩は、鷹狩用に調教した鷹を幕府の要人たちなどに献上することを年中行事にするようになりました。そのようなことから、津軽藩の領内で城下にも近く、平川や岩木川が合流する一帯・真那板付近の原生林を鷹待場に指定し、一切の開発を禁止しました。面積は平川と岩木川本流の合流点を中心に、100ヘクタール以上にもなります。その場所は、明治維新まで、城下や村落に近い極めて肥沃な川原地の手付かずの原生林という特殊な状態のまま残ったのです。明治に入り、米を作るという絶対的な農業の枠組みがなくなると、水田開発がなされないまま残っていたこの地域は、原生林の大木が切り払われた後やがて農民の手に渡り、藍・野菜類・馬鈴薯<sup>ばれいしょ</sup>そしてりんごといった畑作園芸が爆発的に発達する場所となりました。

このあたりは、現在は一面のりんご園になっています。鷹待場の存在は、藤崎の近代農業の上で、極めて重要であったといえます。

なお、良い鷹が捕らえた場所としては、この一帯だけでなく、藤崎の近くでは滝井林といった十川の流域などもあげられ、このあたりでは今でも鷹をよく見かけます。

所在地：藤崎町大字藤崎字郷土川原字真那板 他

## ○農林省試験場東北支場跡

1938年(昭和13年)に藤崎町に創設されたのが「農林省園芸試験場東北支場」です。園芸試験場の誘致にあたっては、いくつかの市や町が活発な誘致合戦を展開していたのですが、農林省の実地調査の結論は、“藤崎町”に設置したいというものでした。園芸試験場では、開場と同時に寒冷地の園芸作物に関する広範な研究にとりかかり、数々の目覚ましい成果を生み出しました。その最大の成果がりんご「ふじ」の育成でした。「ふじ」という名前は“誕生地の藤崎と名峰・富士山”にあやかって命名されました。

その後大戦・終戦を挟んで1962年(昭和37年)の早春、盛岡市の国立試験場に移転統合されました。跡地には現在、弘前大学農場、藤崎園芸高等学校(現・弘前実業高等学校藤崎校舎)・藤崎町営住宅などが整備されています。

所在地：藤崎町大字藤崎字下袋

## ○ふじのふるさと記念広場(旧農林省園芸試験場東北支場 「ガラス温室」)

弘前大学農学生命科学部生物共生教育センター藤崎農場内に、世界一の生産量を誇るりんご「ふじ」発祥の地をアピールする「ふじのふるさと記念広場」が平成22年(2010年)11月に開園されました。同農場には、「農林省園芸試験場東北支場」設立当時から現存する「ガラス温室」があります。

このガラス温室は、昭和13年(1938年)に完成し、園芸試験場の研究施設で唯一取り壊されずに残っている建物です。冬の極寒時でもボイラーにより加温することができるため、一年を通して試験研究のできる、当時としては画期的な施設であり、野菜苗の育成、りんご交雑実生の育成、病原菌の摂取試験など、様々な事に使われていました。平成22年(2010年)藤崎町および住民からの要望を受けて、この温室を当時の面影を残しながら末永く保存するため、弘前大学が修復工事を実施しました。

改修作業の過程で、藤崎農場開設時に勤務していた元大学職員から、ふじの原木の跡地がガラス温室付近であることがわかり、弘前大学は温室改修を契機に、この地で誕生したふじの生誕70周年にちなんだ記念碑を建立。町役場前にあったふじの原木株分け樹も移植され、温室や記念碑周辺を記念広場としました。

所在地：藤崎町大字藤崎字下袋 7-1

## ○藤崎八幡宮

藤崎八幡宮は、1092年(寛治6年)に藤崎城が完成した時、領内の鎮守として創設されたと伝えられています。社殿は藤崎城の土塁の斜面にあります。祀られているのは、一般的に八幡宮に祀られている「品陀別命」(第15代応神皇)ですが、境内にはほかに淡島宮や天満宮などの社もあります。



土塁上には、1340年(暦応3年)の板碑(近くの稱名寺の境内から出土したといわれる)、1881年(明治14年)に建てられた「安東氏顛末記」(当時の知識で得られた安東氏や藤崎城の物語、城の大きさなどが刻まれている)、庚申塔、二十三夜塔などがあります。

藤崎八幡宮は、鹿嶋神社と並ぶ藤崎地方を代表する大きな神社として人々から崇敬を集め、戦争が進められた時代にはその祈願祭などが盛んに行われるなど、地域の人たちのよりどころとなってきました。社殿のある長い土塁とその下の堀跡は、その昔藤崎城を拠点に活躍した安東氏と藤崎城の壮大さを現在に伝える貴重な大切な遺構であるといえます。

所在地: 藤崎町大字藤崎字四本松 69

## ○鹿嶋神社

通称伝馬・大字藤崎字若前にある鹿嶋神社は、藤崎八幡宮と並ぶ藤崎地方を代表する神社で、昔は付近一帯が大林おおばやしと呼ばれる巨大な林であったといわれ、神仏分離以前は、「毘沙門宮びしゃもんぐう」と呼ばれていました。祀られている神様は、建御雷神たけみかづちのかみ(鹿嶋神社に一般的に祀られている天孫降臨に関わる伝説の神様)ですが、本殿には荒磯前神社や愛宕神社も合わせて祀られ、ほかに坂上田村麻呂神霊さかのうえのたむらまろなどたくさんたくさんの神様が合祀されています。

神社の由来は、平安時代初め坂上田村麻呂の蝦夷征伐の際、蝦夷の頭領・恵美えみの高丸たかまるの霊を退治した時、田村麻呂の守護神である毘沙門を祀ったのが始まりといわれます。そして、その時、田村麻呂が地面に突き立てた藤むちの鞭から枝や根がのび、付近を“藤の咲く里・「藤咲村」と呼ぶようになったという、「藤崎」の町名の由来にもなった伝説の場所でもあります。



神社の境内には、神社碑、忠魂碑や平和祈願碑など戦争に関する石碑、名大関大ノ里など相撲関係の顕彰碑、庚申塔など多くの金石文や、藤崎町が管理する相撲場などがあります。

所在地: 藤崎町大字藤崎字若前 15

## ○堰神社

堰神社は、江戸時代初めの1609年(慶長14年)、浅瀬石川から幹線水路である藤崎堰に用水を引き入れる水口の堰根(川の水位を上げるための留め切り)を完成させるために、自らの命を犠牲にして「人柱」となった、せきこん堰八太郎左衛門安高の霊を祀る神社です。

神社は1645年(正保2年)津軽藩の手で創建されました。後に、堰神社は水下の農家からの上納金で運営されるようになり、水利の守り神様として信仰を集め、神主は代々、太郎左衛門の子孫が務めています。

神社境内には、太郎左衛門の200年祭に当たる1808年(文化後年)に建てられた「堰神社祠碑」のほか、庚申塔、農業水利や開田関係の石碑、樹齢400年以上という藤崎町最大級の大銀杏、そして社殿には太郎左衛門が人柱になる場面を描いた絵などがあります。

所在地：藤崎町大字藤崎字横松 39



### 堰八太郎左衛門の人柱の物語

堰八太郎左衛門安高は、堰守の役を勤めていた人物で、力が強く眼光もするどい偉丈夫で、武芸を好み、そしてその思いやりの深さから人々の尊敬を集めていました。

当時、藤崎では新田開発が進み、慶長年間にはこの近郷で千町歩余の水田ができていました。その中でもっとも大切であった灌漑用水は、境松下という所で浅瀬石川をせき止め、水を引いていたのですが、浅瀬石川は山が近く荒々しい急流で、そのためせつかく造った堰根がすぐに破れてしまい、その度に人々は苦心惨たんし、人手をいくらかけても足りず、これまで盛んになった農業もこれで終わりになるのではないか、と思われるほどどうすることもできない状態でした。

そのような状態の中で、堰守であった太郎左衛門は、人々が長年の間苦勞しても成功できなかった水留めの難工事を見て、自分の命を犠牲にしても水留めを完成させ、人々の難儀を救いたいという思いに至ったのでした。太郎左衛門は、藩に人柱になることを願い出ましたが、藩公はその義心に感動しながらも、このような誠の心を持った人物を殺すことは忍びないと、なかなか許可を与えませんでした。

その後も引き続き堰口が水害で押し破られては堰根の工事を幾度となく繰り返し、水下の人々をなげかせました。見かねた太郎左衛門は、藩公に再三再四人柱になることを懇願しました。そして、藩公もその決意の堅さと貴い心に動かされ、堰の被害の深刻さと合わせて太郎左衛門を人柱とすることを許可しました。

1609年(慶長14年)4月14日、村のすべての人々を救うため、太郎左衛門はその一身を捧げて人柱となりました。その貴い心が天に通じたのか、難工事だった藤崎堰の水口の堰根が見事に完成し、その後、水害に見舞われることがなくなりました。



(左)  
堰神社にかけられている  
堰八太郎左衛門の人柱  
の掲額

### 津軽神楽

津軽の里々の神社に奉納される津軽神楽は、津軽藩四代藩主・信政公の霊前に相応しい神楽を奉納するため、藩命により江戸、京都に遣わされ本式の神楽を学んだ、堰神社の神主・せきはちぶんごのかみやすたか堰八豊後守安隆により創始され、1714年(正徳4年)に信政公を祀る高岡霊社(現・弘前市高照神社)に奉納されたのが始まりです。当初は高岡霊社でのみ奉納されましたが、その後各神社で奉納することを許されました。

以来、神職のみの伝承により、高岡霊社をはじめ津軽領内の神社に奉納され、現在も11番の演目が継承されています。2013年(平成25年)に創設300年を迎え、その節目を記念して2013年10月11日には津軽神楽の創始者ゆかりの堰神社において記念奉納行事が執り行われ、現在も毎年続けられています。

津軽神楽は、1956年(昭和31年)5月14日に県無形民俗文化財、1976年(昭和51年)12月25日には国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選ばれています。

### ○徳下八幡宮・イチイの古木

徳下とくげにある徳下八幡宮には、ほむたわけのみこと蒼田別命(応神天皇)と天照大神が祀られています。徳下八幡堂は、1653年(承応2年)に村中によって造られたということですが、その後大破し、1676年(延宝4年)と1685年(貞享2年)に再建されたという古記録が見られます。そして、1873年(明治6年)に一旦常盤八幡宮に合祀されましたが、2年後の1875年(明治8年)に復社し、その年に村社になっています。徳下八幡宮の境内には、安政5年と明治5年の年号が二重に刻まれている庚申塔や、記念石碑などがあります。

また、正面の鳥居に近い境内には、有名な「イチイ(おんこ)の古木」があります。胴回りが2メートル以上あり、樹齢500年以上ともいわれる古木で、旧常盤村ではイチイを「村の木」に、そしてこの古木を「村指定文化財(天然記念物)」に指定しています。

所在地: 藤崎町大字徳下字宮本 4-1

## ○福島遺跡（十川端村跡・稲荷神社跡碑）

福島の中范のあたりに昔、十川端村があり、そこが福島の発祥の地ではないかといわれています。

十川端村は、中世の終わり頃の天文年間(1532年～1554年)に浪岡の北畠氏が編纂した「津軽郡中名字」にも記載されています。そして村の象徴として稲荷神社がありました。そして村がなくなった現在も用水堰に挟まれた堤防の上に「稲荷神社の碑」と松の木が残っており、大切にされています。

所在地：藤崎町大字福島

## ○赤沼

福館地区の「赤沼」は、町に異変があると赤く濁るとされることからその名がついたといわれており、地域の人たちは沼の色を見て豊凶を占ったといわれます。

所在地：藤崎町大字福館



## ○矢沢正八幡宮

矢沢正八幡宮の縁起については、二つの物語が伝えられています。

一つは、大同年間(806～810年)、坂上田村麻呂が蝦夷の頭領・高丸を矢で射殺した際、その矢を修験の僧・明円に与え、正八幡宮を祀って「矢沢山勝軍寺」を建立したという伝説(新撰陸奥国史)、弘藩明治一統誌では、それを延暦3年(784年)のこととし、沼洲村(藤崎村)の近くの赤沼に高丸の遺骸を埋め、矢は正八幡宮のご神体として崇敬したというもの。もう一つは、1615年(元和元年)、弘前の広田三郎左衛門という人が、小畑の三本木から異体の仏像を発見し、それを祀って矢沢村の氏神として崇敬したというものです。

正八幡宮は、昔はもっと藤越寄りの赤沼の方にあったと伝えられています。祀られている神様は、一般的な八幡宮と同じほむたわけのみこと蒼田別命です。1955年(昭和30年)に十二里村と藤崎町が合併するまでは、境内の隣地に十二里村役場がありました。

所在地：藤崎町大字矢沢字福富四番囲 8

## ○水木城址

沼沢地を利用した平城跡で、溝城氏が住んだといわれています。

中世の頃、浪岡城を本拠地として栄えた北畠氏は、北畠顕家<sup>あきいえ</sup>系統で宗家である「浪岡御所」と、北畠顕信<sup>あきのぶ</sup>系統の「川原御所」に分かれ、時には対立関係にあったり、内紛を起こしたりしていました。その「川原御所」である溝城具信の所領地の要の場所にある城・館が、溝城館(水木城)です。

水木城は、その頃岩木山麓の賀田や堀越城で急激に勢力を拡大している大浦氏に対抗する北畠氏の最前線の基地でもあったようです。1562年(永禄5年)に、北畠一族の内紛である「川原御所の反乱」がおこり、溝城館(水木城)は浪岡御所の軍勢に攻められ落城したといわれます。溝城氏はその後、津軽為信に仕え、水木氏を名乗ることになり、1596年(文禄2年)から、「溝城」が「水木」と改められたということです。

現在もほぼ円形に近い溝跡が確認でき、高台のりんご園が館跡です。また、城の機能として周囲に八幡宮、熊野宮などを設け、有事の際の砦にしたといわれています。

所在地: 藤崎町大字水木

## ○水木熊野宮

水木熊野宮は中世時代、浪岡・北畠氏の主要拠点であった溝城館(水木城)の館神(守り神)として創建されました。伊弉諾命<sup>いざなぎのみこと</sup>・伊弉冉命<sup>いざなみのみこと</sup>、誉田別命<sup>ほむたわけのみこと</sup>が祀られています。

境内には、社殿や一般の神社にある狛犬の他に、「熊野宮」の名にふさわしく大きな熊の石像が一对と小さな熊の石像もあり、さらに正面の左右の大鳥居には昇り龍と降り龍が刻まれています。神社の道路端には、「水木城址」の案内板が立てられ、神社に向かって右側の低地になっている場所が、水木城の堀跡であり、高台のりんご園となっている場所が本城のあったところとされています。



所在地: 藤崎町大字水木字古館 15

## ○五輪盛

国道7号線の旧道(羽州街道)から、旧常盤村役場の方へ入ると道端に案内板があり、その少し後方に「五輪盛」と呼ばれる場所があります。ここには昔から長慶天皇の陵墓だという伝説が伝えられていましたが、浪岡北畠氏の川原御所の変で討ち死にした北畠具信父子の墓所ではないかともいわれています。

所在地: 藤崎町大字水木

## ○常盤八幡宮

常盤八幡宮の「年縄奉納行事」は、町の無形民俗文化財に指定されています。常盤地域の多くの神社の社頭には、常盤八幡宮と同じような見事な年縄が毎年飾られています。

常盤八幡宮の創立年などは分かってはいないものの、天和年間(江戸時代中期の初め)以後の古図にこの神社が登場しているところから、古くから伝統のある、この地方を代表する神社であることが分かります。1873年(明治6年)には村社にも選ばれています。祀られている神様は、ほむたわけのみこと おきながたらしひめのみこと 誉田別命・気長足姫命です。



所在地：藤崎町大字常盤

## ○日本基督教団藤崎教会

津軽では明治維新に際して、土族の帰農政策の一環として武士を農村に在宅させる制度が進められましたが、東奥義塾が再興された後、その塾頭を務める本多庸一の家族が藤崎に住んでいたことから、藤崎は弘前と並んで早い時期に基督教と出会うことになりました。

藤崎村に最初に牧師が派遣され、講義所が開かれたのは1886年12月(明治19年)、翌年には字武元の以前町役場があった場所の隣地に最初の教会堂が建てられました。そして、現在地の藤崎駅通りに教会堂ができたのは1925年(大正14年)のことです。藤崎での初期の基督教布教の活動は、本多庸一の影響が大きいといわれており、盲目の牧師として知られた藤田匡、リンゴ産業の先駆である敬業社の中心となった佐藤勝三郎、同じ敬業社の同士で実業家の長谷川誠三などが基督教に入信しました。そして、基督教や教会の関係者の活動は、藤崎の教育や産業に大きな影響を残しています。

旧藤崎町の保育園は、1948年(昭和23年)に町の委託によって基督教教会に併設されたのがその発端で、教会には現在も幼稚園が併設されています。

所在地：藤崎町大字藤崎字館岡 49-4



## 5. 自然・景色

### ○ふじ原木公園

昭和 13 年から 37 年(1938～1962 年)にかけて藤崎町に開設されていた農林省園芸試験場東北支場の最大の研究成果が、りんご「ふじ」の品種育成でした。

試験場が盛岡に移転統合され、「ふじの原木」も岩手県盛岡市へ移植されましたが、平成 4 年(1992 年)、ふじ命名 30 周年にあたる年に、盛岡市にある農林水産省果樹試験場盛岡支場から「株分けしたふじ原木」を藤崎町が譲り受け、藤崎町役場庁舎前に植栽されました。その後、この樹は 2004 年(平成 16 年)に町から藤崎園芸高等学校(現・弘前実業高等学校藤崎校舎)が譲り受け、同年 5 月、同校の第 2 農場・ロータリー前に生徒たちの手により移植されました。



さらに、藤崎園芸高等学校(現・弘前実業高等学校藤崎校舎)では、2004 年(平成 16 年)2 月、盛岡市にある独立法人果樹研究所りんご研究部よりふじ原木の穂木(台木に接ぎ木するために切り取った枝のこと)15 本を貰い受け、原木穂木から根・幹・枝などのすべての細胞が「ふじ原木」と同じ遺伝子をもつと考えられる樹を作る計画を実行しました。そうして誕生したのが、「ふじ原木公園」です。原木公園の除幕式は、2004 年(平成 16 年)10 月に行われました。

現在、各地の畑に栽培されているふじは、「枝変わり(体細胞突然変異)」によって着色・収穫時期・味などの改良が進み、原木とはかなり異なるいろいろなふじがあります。

青森県内で、ふじ原木と同じ遺伝子をもつと考えられるのは、藤崎町から譲り受け、第 2 農場・ロータリー前に移植された 1 本のふじと、生徒たちの手によって接ぎ木され、さらにその穂木から発根させた「ふじ原木公園」にあるふじだけです。現在もその貴重な「ふじ」の木々たちは次代に遺すべき町の財産として大切に育てられています。

所在地：藤崎町大字藤崎字下袋 7-10 弘前実業高等学校藤崎校舎敷地内

## ○白鳥ふれあい広場（ライフコート平川白鳥広場）

藤崎町は、白鳥の飛来地として有名です。毎年 300 羽以上の白鳥を 12 月～3 月末頃まで見ることが出来ます。土手に建つログハウス「こーやまらくん」は、白鳥観察を楽しむのに最適です。白鳥ふれあい広場は、年間を通じて岩木山の雄姿が望める、絶景ポイントでもあります。夏は津軽花火大会の会場にもなっています。



【藤崎のハクチョウ:昭和 51 年(1976 年)1 月 26 日、県の天然記念物に指定されています。】

所在地:藤崎町大字藤崎字岡本（平川河川敷）

## ■白鳥観察施設『こーやまらくん』

平川土手に建つログハウス「こーやまらくん」は、白鳥観察を楽しむのに最適。白鳥が訪れる、12 月～3 月の間だけ使用することができます。暖かい施設の中で、ゆっくりじっくり白鳥を観察することができます。

「こーやまらくん」の名称は、施設が作られた時、子どもたちから募集したもので、“丸太でつくられた小屋”の意味だということです。

所在地:藤崎町大字藤崎字岡本 13-4



## ○みずべの学習ひろば

津軽平野を流れる岩木川と平川の合流部に位置し、水の流れが活性化して自然性が高く、重要な環境条件となっており、たくさんの動植物が安定した生活出来る環境が整っています。ビオトープ(※)と呼ばれる自然観察池では水生生物、水質・水流等の観察、野鳥観察を楽しめます。自然環境を保護・復元しながら自然の大切さを学び、体験するための施設です。



※**ビオトープ**…湿地のような浅い水面の地形は、様々な生物の楽園です。このようなたくさんの動植物のための安定した生活空間のことをドイツ語でビオトープと呼んでいます。

所在地:藤崎町大字藤崎字郷土川原

## 6. 施設

### ○藤崎町文化センター

1996年(平成8年)に開館され、町内外の人たちや団体の活動、芸術文化活動の場となっています。楽屋兼リハーサル室を備え、約600人が収容できるホールでは、本格的なコンサートも楽しめ、多彩な活動、活用が行われています。

所在地: 藤崎町大字西豊田一丁目1



### ○常盤生涯学習文化会館

1989年(平成元年)に開館され、芸術・文化等のサークルやクラブの活動を奨励し、住民の芸術文化活動の振興に努めています。図書室も開放しており、各領域にわたる学習機会の場として、年齢を問わず多くの地域住民に利用されています。

所在地: 藤崎町大字常盤字三西田35-1

### ○ふれあいずーむ館

1999年(平成11年)に開館され、図書館「大夢」も併設されています。各種団体の活動拠点の場となっているほか、冠婚葬祭、レセプションなど、地域の方々に幅広く活用されています。見上げると光を放つ美しいステンドグラスも特徴の一つです。



### ・コミュニティホール「ふれあいひろば」

白を基調としたルネッサンス風の天井も高く広々としたエントランスホールは、文化の創造とふれあいの場にふさわしい象徴的な空間となっています。町民の自由な利用に供する「憩いと交流の場」として、その中から様々なふれあいが生じる施設ということから「ふれあいひろば」としました。椅子席で最大400人を収容できる「ふれあいひろば」は、各種研修や集会、各種展示会場、各種サークル活動などの多目的に活用できます。また可動式間仕切りで3室に区分でき、効率的な使用が可能です。(水仙・秋桜・鈴蘭)

所在地: 藤崎町大字藤崎字中村井21-1

## ○常盤ふるさと資料館あすか

1996年(平成8年)に開館され、資料館の柱である先人達(版画家の高木志朗氏、農業の父といわれた浅利崇氏、版画家の円平仁氏など)の作品や蔵書、遺品が多数収蔵されています。町内外の芸術・文化グループや個人アーティストによる企画展など、芸術文化の発信地として機能しています。



### ・展示室

地元美術クラブ会員展や写真クラブ会員展、書道会発表展、クラフト展示会など常に期間を設けて各企画展を開催中。企画展開催以外の期間は、常設展として、高木志朗・円平仁展を開催しています。

### ・図書室(浅利文庫)

旧常盤村、村長及び県議会議員を務めた故浅利崇氏の遺族より、浅利氏の愛読書を寄贈されたものを「浅利文庫」として開設しております。

所在地:藤崎町大字水木字村元 15-1

## ○スポーツプラザ藤崎

1988年(昭和63年)に開館され、地域での自主的なスポーツ活動の場となっています。柔剣道室、トレーニング室などを備える充実した設備は、町内だけでなく町外の方にも利用され、アリーナは各種大会の会場としても利用されています。

### ・収容人員

2000名(2階固定席、立見席含む)

### ・使用内容

競技場 バスケット・バレーボール各2面

卓球8面、バドミントン6面、体操

所在地:藤崎町大字西豊田一丁目1

## ○スポーツプラザときわ

2004年(平成16年)に開館され、住民体育をはじめとする地域のサークルやクラブの活動の場となっています。トレーニング機器も整備し、団体だけでなく個人の方にも利用されています。

所在地:藤崎町大字常盤字富田 19-1



### ○藤崎町農業者トレーニングセンター

1983年(昭和58年)に開館され、主にスポーツ少年団による効果的な活用がなされています。地域における生涯スポーツの普及及び指導者の育成の場として、また、各種社会体育事業の会場としても利用されています。

所在地: 藤崎町大字常盤字三西田32



### ○藤崎町コミュニティプラザぼっぼら

JR北常盤駅は2001年(平成13年)12月に改築、「コミュニティプラザぼっぼら」を併設し、生まれ変わりました。「ぼっぼら」とは、「汽車(ぼっぼ)と私らの施設」という意味があり、誰からも親しまれる人気のある施設であって欲しいという願いが込められています。図書コーナーや、偉大な版画家・高木史朗氏、円平仁氏、年縋を紹介したミニギャラリーなど住民の憩いの場となっています。

所在地: 藤崎町大字常盤字二西田39



### ○農産物直売施設 JA つがる ふじの里

新鮮な野菜が他より安いと言うことで評判です。「ふじの里」という名のように、りんごの代表品種ふじの発祥の地として、りんご関連商品がメインです。季節により地元のサクランボ、桃、ぶどう、洋梨など各種くだものも贈答用に大好評です。

所在地: 藤崎町大字藤崎字中豊田15-4

## ○食彩ときわ館

朝、採れたばかりの野菜、果物、生花から季節の山菜、お米まで新鮮な食材が豊富に取り揃えており、朝一番は行列ができるほど評判のある産地直売所です。

「にんにく」はもちろん、時折「アイスプラント」「カリッコリー」など珍しい野菜もあり、常盤地区の意欲的な農業への姿勢を垣間見ることができます。四季折々の野菜や果物、飲んで納得のトマトジュース、こだわり栽培のお米や鶏卵など、産直ならではの新鮮でおいしい「食彩」たちがいっぱいです。

食彩ときわ館のモットーは、安全、安心、新鮮で顔の見える農産物を提供することです。産直施設内には、糖度計を備えつけてあり、消費者が農産物の糖度を測定できます。現在は、平成30年春、「ふじさき食産業創造拠点施設」としてリニューアルオープンを目指し改築中です。

所在地：藤崎町大字榊字和田 65-8



## ○弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター（藤崎農場）

「ふじ」発祥の地である農林省園芸試験場東北支場の跡地にあります。りんごをはじめ、野菜や花など園芸作物を中心とした実習教育と研究活動を行っています。特に、地域生産者との結びつきを大切にしながら、りんごの生産現場で直接役立つ研究を中心に、気候変動など地球規模の問題に対処する研究にも取り組んでいます。また、次世代を担う特徴あるりんご品種の育成や普及に、地域と連携して取り組んでいます。

所在地：藤崎町大字藤崎字下袋 7-1

## 7. 食

### ○藤崎町の特産品



#### ■りんご「ふじ」

日本を代表するりんごの品種「ふじ」は、藤崎町が生まれ故郷。生産量で世界一の品種である「ふじ」は、国光とデリシャスの交配により生まれ、1962年(昭和37年)に日本を代表する富士山と藤崎町の一字をとって「ふじ」と命名されました。実が大きくて歯ごたえがあり、果汁も多く、日持ちもするため、贈答用として好まれ、蜜入りのものは特に人気があります。



#### ■米

常盤地区では、昭和50年代から減農薬栽培にいち早く取り組み、主食だからこそ安全安心なものを、という信念で米作りを進めてきました。品種はつがるロマンを主力としつつ、食味で特A評価を獲得した新ブランド米・青天の霹靂せいてん へきれきの作付けが増えつつあります。

## ■ときわにんにく

ときわにんにくの代表的な品種は「福地ホワイト六片種」です。雪のように白く、粒が大きいのが特徴で、とりわけ県内随一の品質を誇ります。栽培には、鶏ふん等を活用した安全な堆肥を使用して有機・減農薬栽培、完熟堆肥づくりの推進など環境に優しい安心・安全な商品生産に積極的に取り組んでいます。また、出荷前には、氷温貯蔵され、各農家がにんにくを1つ1つ丁寧に選果し、品質の均一化に努めています。品質の高さが支持され、出荷が年々増えている町の新しい特産品です。

## ■トマト、トマトジュース

減農薬栽培にこだわり作られた藤崎町のトマトは、水に入れると沈むほど比重が重く、旨味が多いと定評があります。近年は、果肉の質がしっかりとした「麗夏」という新しい品種にも取り組んでいて、首都圏の市場で高い評価を得ています。麗夏は、「トマトの王様」とも呼ばれています。

地産の生食用トマトだけを原料に使用し、塩分等不必要なものを加えず、無添加にこだわって作った果汁100%のトマトジュースです。普通のトマトジュースは瓶詰め後すぐに出荷されますが、このトマトジュースは、最低3か月間は出荷せず、瓶熟させる事で味と香りが落ち着き、トマトが持つ独特の深い味わいが楽しめます。

## ■アスパラガス

藤崎町常盤地区では、もともと肥沃な土地でありながら、長年に亘る安全な土づくりへのこだわりの結果、確かな品質のアスパラガスが育まれています。力強くスクスクと伸びた茎は、太くて甘く、旬のころには直売所の人気の野菜となります。

## ■トキワの赤いたまご

トキワの赤いたまごは、無添加の自家配合飼料による養鶏に徹した安心のブランドです。安全な飼料の確保に努め、「安心のときわブランド」にこだわっています。黄身と白身に弾力がある新鮮な「赤いたまご」は、毎日の食卓にかかせません。

## こめたま

フードアクションニッポンアワード2009で大賞と農林水産大臣賞をダブル受賞。「こめたま」の黄身はきれいなレモンイエローをしています。それは鶏がお米を食べて育った証しであり、餌となるのは、地元の休耕田を活用して栽培した飼料米です。休耕田の活性化という利点も生まれるこの新しい試みは、全国的にも注目を集めています。



## ○菓子、スイーツ、パン

### ■米粉パン

お米の粉「米粉」は、近年、全国的に活用が進められていますが、藤崎町でも米どころとして積極的な取り組みを行っています。地元のお米からできた米粉を使って作られたパンは、もちもちとした食感が評判になり、この米粉パンは、食彩ときわ館、常盤かあさんの店で販売されています。

### ■ジャム[青森りんご加工株式会社(ARK)]

ふじ発祥の地・青森県藤崎町にある、昭和16年創業の老舗搾汁メーカーです。少し懐かしい、レトロなパッケージが可愛いジャムは心をこめて手作りされています。

青森りんご加工の商品は青森りんご加工本社、食彩ときわ館でも購入することができます。青森みやげとしても人気のある商品です。

所在地：藤崎町大字藤崎字中村井 28-10

### ■藤崎スイーツ

#### イシザワ菓子舗

名物「ジャンボおにぎり」イベントのキャラクター「ジャン坊くん」の生どら焼きは、おむすびをイメージしたふわふわ食感で大人気。新しくキャラメル味も加わりました。地元名産の卵に見立てた金柑の黄身入りで、半熟卵そっくりの「たまご最中」もロングセラーの人気お菓子となっています。

所在地：藤崎町大字常盤字一西田 14-23

#### きくち覚誠堂

シュー皮まで黒い「いかすみシュー」のほかに、ふじワングランプリでも多くの票を集めたスイーツ「トキワ卵のめちやウマブリュレ」や「トキワ卵のプリン」が人気を集めています。また、かりんとうまんじゅうなど和菓子の種類も豊富です。おかめのような絵の看板が目印です。

所在地：藤崎町大字藤崎字村岡 51

#### アントルメ佐藤菓子店

創業100余年。藤崎出身の名力士の名前を冠した「大の里」は、老舗らしい銘菓で、りんごのあん入りでホッとする味です。いちご大福やシフォンケーキ、油で揚げない焼きドーナツもファンが多い人気商品となっています。

所在地：藤崎町大字藤崎字村岡 27

#### ブーランジェリー ル・ボヌール

「ボヌール」はフランス語で「しあわせ」のこと。焦がしバターを生地に練りこみ天然酵母で作った「クロワッサン」は味わってほしい一品。天然酵母にこだわる理由は、防腐剤や保存料を使わなくても、日持ちするという安心への配慮から。

所在地：藤崎町大字西豊田二丁目 2-7

## 8. 農業

### 〇りんご「ふじ」発祥の地



#### 藤崎地区

旧藤崎町では、岩木川と平川の合流地点をかかえ、恵まれた肥沃な土壌のもとに、りんごと米を中心に展開してきました。藤崎はりんご産業の発祥の地ともされ、昭和初年までりんごの生産出荷額において、津軽の指導的な立場にあったともいわれています。さらに特筆すべきは「敬業社」の存在とりんごの品種の中で日本一の生産量を誇る「ふじ」が藤崎町で誕生したことです。

#### 敬業社の偉業

我が国のりんごは、江戸時代以前から「地りんご」等がありましたが、現在広く栽培されている西洋りんごは、明治初年に欧米から輸入され、国が苗木を各県へ配布したことから始まりました。青森県では、明治維新で職を失った武士たちに新しい産業をおこさせる「授産事業」の性格が強い事業で、1875年(明治8年)から始まりました。りんごの栽培は津軽の風土に適しており、意欲的な指導者たちに支えられ、やがて我が国のりんご産業をリードする地位を築きました。

青森県のりんご産業は、弘前の菊池盾衛らがおこした「化育社」や「接木伝習所」、藤崎の「敬業社」、黒石の「興農会社」、板柳の「東奥義塾りんご園」等がその発端となりました。そして、先覚的なりんご栽培の成果によってりんご栽培の熱が高まり、やがてりんご試験場等の研究指導体制が整い、整枝剪定等の栽培技術、病虫害や農薬、品種等び研究や技術開発が進み、りんご農家の人たちの意欲と融合して、現在の青森りんごが築かれていったのです。

藤崎におこった「敬業社」は、りんご栽培を目指した株式組織で、1885年(明治18年)佐藤勝三郎、長谷川誠三らによって結成され、岩木川・平川の合流点に近い真那板縁まないたがちの荒地7ヘクタール余りを開墾し、りんごを植え付けました。必死の努力の結果、結成から5年後に初めて実を付けてからは、目を見張るほどの収穫を得ることができ、1893年(明治26年)には明治天皇にりんごを献上するという名誉に浴し、販売面でも青森に直売所を設置するなど、躍進を遂げていきます。「敬業社」は、15年余りにわたり目覚ましい成果を挙げましたが、同時に病気や害虫に悩まされ、1901年(明治34年)に解散しました。そして、りんご栽培は病虫害等の大きなリスクを背負う反面、大きな利益が期待できることを証明し、地域の人たちのりんごの栽培熱を高め、青森りんごの発達に貢献したのです。

### 「ふじ」の誕生

しばしば冷害に悩まされる東北の農業・東北の園芸作物の試験研究が強く望まれ、1938年(昭和13年)に藤崎町に創設されたのが「農林省園芸試験場東北支場」です。園芸試験場の誘致にあたっては、いくつかの市や町が活発な誘致合戦を展開していたのですが、農林省の実地調査の結論は、“藤崎町”に設置したいというもので、誘致合戦を展開した地域や当の藤崎町の関係者を驚かせたといわれます。

試験場では、町をあげての支援と期待に応えるように、1939年(昭和14年)からりんごの新品種の開発に着手し、開始から3年の間に1万3,775本の実生が生まれ、その中から慎重な検討を重ね選抜され、1958年(昭和33年)「東北7号」として発表したのが「ふじ」です。「ふじ」は、1962年(昭和37年)3月、全国りんご協議会名称選考会で正式に命名され、同年4月に「りんご農林1号」として品種登録されて一躍脚光を浴び、1982年(昭和57年)にデリシャス系を抜いて、我が国の生産高第1位となり、名実ともに日本一のりんごに成長しました。

りんごなどの新しい品種を作るには、おしべから採った花粉を別の品種のめしべにつけ(交配)、そして生まれた果実から採った「種子」を植えて、生えてきた小さな木(実生)を育て、その実生や果実の、形や色や味や貯蔵力、木の性質や病害虫に対する強さ、実際の栽培のやりやすさなどの優秀なものを選び、さらに選ばれた候補を何年も試験栽培して、いよいよ立派な品種だということになって、名前がつけられ登録されます。「ふじ」もこうした過程を踏んで、交配から品種登録まで23年という月日を要しましたが、長い苦勞の道が輝かしい品種を世に送り出したのです。

その後、「ふじ」を生んだ、園芸試験場は、1950年(昭和25年)に、「農林省東北農業試験場園芸部」に組織替えされ、盛岡市に移転統合される方針が出されました。そして1962年(昭和37年)に移転を終わり、3月に閉場式を行い、24年間の歴史を閉じました。現在は、弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センターとして、りんごや各種園芸の試験や研究が熱心に行われています。また、弘前実業高等学校藤崎校舎ふじ原木公園には、ふじの原木のひこばえを育成した「原木」が植え付けられており、毎年実をつけています。

## ◎ふじ

ふじは、藤崎町にあった農林省園芸試験場東北支場(現:農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所リンゴ研究拠点)において誕生した、世界的品種です。英語圏では Fuji と表記されています。

### 特徴

蜜が入り、甘みが強いのが特徴。食味に優れています。熟す時期が非常に遅い品種であり、11 月上～中旬に収穫期を向かえます。保存性が高く、普通冷蔵でも翌年 2 月下旬～3 月頃まで保存が可能です。

### 有袋栽培と無袋栽培

りんご「ふじ」は、りんごの実に袋がけをする「有袋(ゆうたい)栽培」と、袋がけをしない「無袋(むたい)栽培」の両方が行われています。

有袋栽培は、果実に袋をかけて栽培することです。果実の小さいうちから袋をかけ遮光し、秋に袋を取り太陽に当て着色させると、外観が鮮やかなりんごになります。甘さが控えめになると言われていますが、無袋栽培より日持ちが良いため、年間を通して流通させることができます。また、袋かけによって病害虫から果実を守る効果もあります。

無袋栽培のりんごは、太陽光をたくさん浴びるため、一般的に有袋栽培のものよりも糖度が高く蜜が入りやすいと言われています。無袋のりんごは販売時に「サン(太陽の“sun”)」が品種名の前につけられ、「サンふじ」と言われます。つまり、「サンふじ」と名前がつけられているものは、無袋ふじを指しています。

## ◎ <sup>くれない</sup>紅の<sup>ゆめ</sup>夢

1994年(平成6年)に弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター(藤崎農場)において紅玉にスターキングデリシャスを交配して得た種子約1600個を播種、育成した実生の中の一つです。2010年(平成22年)3月に品種登録されました。

しかし、2010年にDNA解析したところ、父品種はスターキングデリシャスでなく、場内にあるエターズゴールドであることが判明。ところが、エターズゴールドは果肉が淡黄色のりんご。これが本物のエターズゴールドではありませんでした。そこで、農場内にあるさまざまなりんごの遺伝子を比較・分析した結果、「紅の夢」の父親は「エターズゴールド」とラベルの付いた、品種名のない樹であることが明らかになりました。

「紅の夢」の果皮は濃紅色、重さ300～400gほどのりんごで、藤崎町での収穫期は10月中・下旬です。

### 特徴

最大の特徴は果肉がきれいな淡紅色に着色することです。無着色でも鮮やかに発色することから、果肉色を生かしたジャム、ジュース、菓子などの製造が注目されています。

遮光度の強い袋をかけて果皮を真っ白にしても果肉は微かに着色することから、加工原料の生産が目的であれば葉摘みや玉廻しなどの着色管理は不要と考えられています。

### 食味

糖度は13.3度、酸含量は母品種の紅玉並みで酸味が強く渋味はありません。もちろん生食も可能ですが、味や色の特性を生かした加工用に注目されています。

紅玉と同様に、焼きりんごやアップルパイにとても合い、特徴である果肉の淡紅色が映えるものとなります。このりんごのジュースで焼酎を割ると淡いピンク色のきれいな、美味しいお酒となります。

### データ:紅の夢

2010年3月11日品種登録

登録番号「15259」

育成者:塩崎雄之輔

登録者・権利者:国立大学法人弘前大学

紅玉×赤肉親系統1

(エターズゴールドとラベルの付いた樹)



## ◎こうこう

「こうこう」は弘前大学の塩崎雄之輔氏により、1981年(昭和56)年に藤崎町において育成されました。真っ赤なりんごである弘大1号にふじを交配し、その250本の実生の中から選抜・育成したものです。その後、増殖を行いながら特性の調査を継続し、1994年(平成6)年にその特性が安定していることを確認して育成を完了しました。

両親が赤いりんごですが成熟すると黄色になる品種で、初めて結実したのは1987年(昭和62年)でした。藤崎町において10月下旬～11月初旬に成熟します。品種登録は1999年(平成11)年です。

### 特徴

円形ないし扁円形、300g前後の中程度の大きさの黄色い果実のため、赤い色が着く品種のように、秋になって葉摘みなどの色をよくつけるための作業は不要です。

また斑点落葉病という病気には、抵抗力の強い父品種のふじよりもっと強い品種です。

### 食味

果肉は黄色でしっかりしていて、蜜がたくさん入ります。甘く、芳香もあり、酸味も穏やかで、甘酸適和の多汁なりんごです。貯蔵性は非常によく、長期保存ができます。保存しておいてもちょうどよい硬さを保ち、ぱりぱりとした口当たりのよい美味いりんごです。

最近の研究で「甘みの質」が他のりんごと異なることが明らかになってきました。

### データ:こうこう

1999年4月15日品種登録

登録番号「7179」

育成者:塩崎雄之輔

登録者・権利者:塩崎雄之輔

弘大1号×ふじ



### ★「こうこう」の名称について

育成者の塩崎氏によると、品種名「こうこう」の漢字は

○弘前大学でできた黄色いりんごの「弘黄」

○幸せを呼ぶ黄色いりんご「幸黄」

○親孝行するときに贈るりんご、親孝行する人が食べるりんご「孝行」

○高校生が食べれば大学合格が、中学生が食べれば高校への合格間違いなし「高校」

○「こうこう」を食べればあなたの、わたしの人生が煌々と光り輝く「煌煌」

…と、食べる人、贈る人にそれぞれ好きな言葉を思い浮かべてほしいとの願いを込めて名づけられたそうです。

## ○畜産業

常盤地区では、畜産業も盛んで、2003年(平成15年)の家畜飼養頭数は、豚が約4,100頭、鶏が8万5,000羽となっており、ここで出される鶏糞などは安全な堆肥となり、有機の里の農業を支えています。

1960年(昭和35年)に設立された常盤村養鶏農業協同組合は、鶏糞などから堆肥をつくり、その堆肥を使い米やりんごなどを栽培、そこから稲のもみ殻は燻製化して養鶏場の敷材に、りんご剪定枝を肉加工品のスモークに活用するなど、循環型農業に早くから取り組んできました。ここで生産される「赤いたまご」は無添加の自家配合飼料による養鶏に徹した安心ブランドとして、全国から高く評価されています。

## ○藤崎町の米づくり



## ◎なまず米

藤崎町徳下地区では、ナマズをシンボルとしたコメ栽培を進め、「なまず米」として徳下集落農業活性化協議会がブランド化を推進しています。

かつて、ナマズは全国の水田で広く見られたものですが、農業用水路の近代化で生育が難しくなっています。こうした中で、藤崎町徳下地区では地元の有志らが平成20年度(2008年度)よりナマズ用の魚道整備などに着手。ナマズが元気に暮らせる水田で育てた付加価値の高いクリーンライスのブランド化を目指しています。

平成27年度(2015年度)には、国や県からの補助金を受け、同地区内にビオトープ(生物生息空間)を完成させました。その一角に設けた水田で作付けした米は「なまず米」として、食彩ときわ館で販売し、好評を得ています。今後、作付面積を増やし、販路拡大を計っています。

また、整備したビオトープは、ナマズの観察に加え、田植えや収穫体験を通して地域の子もたちへの自然教育にも寄与しています。

## ◎青天の霹靂

青森県は米の主産県でありながら、全国に通じるブランド米を持っていなかったことや米の過剰傾向もあり、県産米の販売環境は一層厳しさを増しています。このような状況の中、青森県産業技術センターが約 10 年の歳月を費やし、選抜・育成してきたのが「青天の霹靂」です。「青天の霹靂」を早期にブランド化し、本県の主力品種である「つがるロマン」や「まっしぐら」など県産米全体の評価向上につなげていこうと考えています。

日本穀物検定協会の発表した「米の食味ランキング(平成 26 年産)」では、5 段階評価の中で最高の「特 A」を取得しました。参考品種ながら、これは青森県産米では初めてのこと。2015 年(平成 27 年)秋に本格デビューが決まり、青森県を代表するブランド米への期待が高まっています。

### 名前の由来

青天の「青」は青森の青、「天」は遥かに広がる空。「霹靂」は稲妻。稲に寄りそい、米を実らせませす。青森の晴れわたった空に、突如として現れる「稲妻」のような鮮烈な存在となって欲しい、あおもり米を牽引して欲しい、との願いが、この名前には込められています。

### 味の特徴

「青天の霹靂」は、粘りとキレのバランス、上品な甘みが特徴のお米です。ほどよいツヤとやわらかな白さがあり、粒はやや大きめの、しっかりとしたお米です。食べごたえがあるのに重すぎない、思わずおかわりしたくなるような美味しさです。

また、食材豊かな青森で誕生したお米らしく、海のもの、山のもの、里のもの、どんなおかずとも相性がよく、頼もしさがあります。

### 県を代表するブランド米へ

青森県の米づくりの経験と情熱をすべて注ぎ、開発した新品種、それが「青天の霹靂」です。米は県内全域で栽培されていますが、「青天の霹靂」は、その中でも特に気候や土壌などの条件が良好な地域に限定して栽培されます。藤崎町も栽培地域に指定されている地域のひとつです。栽培にあたっては、土づくりを行うほか、肥料や農薬を減らすなど、美味しく安全・安心な米づくりを徹底します。また、食味を検査し、一定の基準以上のものを出荷することで、ブランド米としての品質を維持していきます。

## 9. 文化・芸術

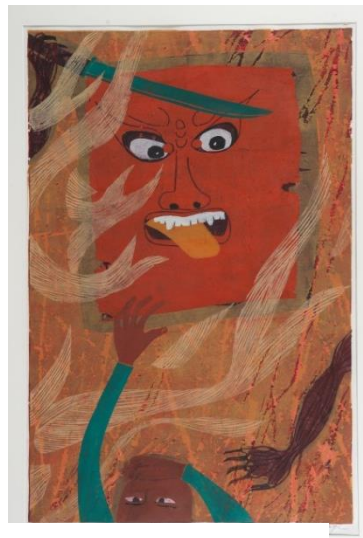
### ○高木 志朗

卓越した造形感覚と色彩鮮やかな作品で知られる版画家の高木志朗氏は1934年(昭和9年)、合併前の旧常盤村大字榊で篤農家の四男として生まれました。高木氏が版画家としての道を歩むきっかけには、中学校の美術講師で後に版画家として大成した天野邦弘氏の影響がありました。

また、進学先の武蔵野美術大学で講師をしていた棟方志功氏との出会いもあり、高木氏の気持ちは決定的なものとなりました。自身のありったけの力を込めて彫り続けた数々の作品の多くは、生活が苦しかった頃に援助を惜しまなかった村の友人達への感謝を込め、村に寄贈されました。これが「常盤ふるさと資料館あすか」を整備するきっかけとなりました。

代表作は、クラコウ国際版画ビエンナーレ展でグランプリを獲得した「日本の鬼」。これとは対照的な作品「聖女」は「作品の中ではもっとも時間をかけた。おそらくボクの絵の中ではピカイチだろう」と自らが語ったように、高木氏の心の動きが推察される貴重な作品です。

代表作品:「日本の鬼」



高木志朗作「日本の鬼」

### ○円平 仁 (水谷 毅)

円平仁(本名:水谷毅)は1930年(昭和5年)、合併前の旧常盤村旧富木館村大字水木の水谷家の六男として生まれました。国民学校高等科を卒業後、青森市旧浪岡町の宮大工山平藤兵衛に弟子入りし、宮匠彫刻を本業としていました。

その後、奈良の天理教に乞われて、教会建造物の彫刻を手がけ、その技量が認められ多くの神社仏閣の仕事に携わりました。1963年(昭和38年)、脳内出血で右半身不随となり、闘病生活に入りましたが、まもなく病気を克服し、木版画の制作に取り組むようになりました。

1988年(昭和63年)に逝去するまでに、数多くの展覧会で入選し、県内外で個展も開催しています。その作品の多くが「常盤ふるさと資料館あすか」に寄贈されています。津軽獅子舞シリーズ、躍動感溢れる野生の馬が代表的な作品です。

代表作品:「山がらみの舞」



円平仁作「山がらみの舞」

## ○菊様の舞／松助踊り

菊様の舞は、明治初期、鹿嶋神社の近くで寺子屋を開設した安倍菊五郎安基<sup>あべきくごろうやすもと</sup>によって作られた舞で、お囃子に合わせ、黒紋付き袴姿で2本の扇子をかざして舞い踊ります。祝いの席などで踊られ、近年では結婚披露宴などでもよく披露されます。お囃子は、菊五郎の先祖の堰神社4代神主の堰八豊後が大成した「津軽神楽」の一部を作り変えたといわれる「津軽夜神楽」で、弘前など各地に似たメロディーが伝えられています。

また、松助踊りは、菊様の舞を浴衣姿でも踊れるようにと、藤田松助<sup>ふじたまつすけ</sup>が振り付けしたものです。どちらも町の無形民俗文化財に指定されており、現在では、藤崎町文化協会が保護伝承等を行っています。

## ○獅子踊り

津軽地方に古くから伝わる獅子踊りは、獅子頭をつけた舞い手3人に、お可笑(かしこ)という道化役が加わり、鉦や太鼓を叩き、笛の囃子に合わせて舞い踊ります。旧常盤村水木地区に伝わる「水木獅子踊り」は、1962年(昭和37年)に県無形民俗文化財に指定されました。

獅子踊りの中でも「福島獅子踊り」は、地区で行われる催しで舞いを披露するほか、芸能大会にも名を連ねるなど、積極的な伝統芸能活動を行っています。

## 10. 工芸品

### ○ひば曲げもの

藤崎町には青森県内でただ一人のひば曲げ物職人である境勇三さんがいます。かつては日本三大美林のひとつである青森ひばを使った「ひば曲げもの」を作る職人が弘前市や青森市など津軽各地に存在していました。しかし、その需要は石油製品の台頭により激減し、曲げもの職人も同様に減少。境さんは、最後の一人として県の伝統工芸士に認定されています。



セイロやひしゃくなど、すべて手作りの曲げものは手にやさしくなじみ、愛着をもってずっと使いたくなる一品です。

#### 【主な製品】

ひしゃく、セイロ

### ○津軽塗

「津軽塗」の正確な定義というものは存在ませんが、一般的には津軽地方で生産される伝統漆器の総称とされています。津軽塗の特徴は、堅牢で実用性に富んでいると同時に、非常に優美な外見を持つところ です。



津軽塗はひばの素地に塗り、研ぎ、磨きを繰り返し、48もの長い工程を経て完成されます。<sup>から</sup>唐

ぬり ぬり な な こぬり もんしやぬり にしきぬり 塗、七々子塗、紋紗塗、錦塗の伝統的な4つの技法は現在も受け継がれ、さらに現代風のアレンジが加わることで多様な文様を生み出しています。1975年(昭和50年)には、国の伝統的工芸品に指定されました。

#### 【主な製品】

椀、重箱、テーブル、茶器、盆、箸、飾棚

## 11. スポーツ

### ○チャレンジデー

チャレンジデーとは、毎年5月の最終水曜日に世界中で実施されている、住民参加型のスポーツイベントです。この日は、人口規模がほぼ同じ自治体同士が、午前0時から午後9時までの間に、15分以上継続して何らかの運動やスポーツをした住民の『参加率(%)』を競い合います。対戦相手に敗れた場合は、相手自治体の旗を庁舎のメインホールに翌日から1週間掲揚し相手の健闘を称えるというユニークなルールが特徴です。年齢や性別を問わず誰もが気軽に参加でき、『住民の健康づくり』や『スポーツ振興』、『地域の活性化』のきっかけづくりに最適なスポーツイベントです。

藤崎町は2008年(平成20年)からこの取り組みに参加し、町のスポーツ振興と健康増進に力を入れています。

#### ★過去5年間のチャレンジデー 結果

	人口	参加者	参加率	勝敗
<b>2013年</b> 藤崎町	15,858人	10,696人	<b>67.40%</b>	勝利
対戦相手 三種町(秋田県)	18,933人	5,995人	31.70%	
<b>2014年</b> 藤崎町	15,715人	8,723人	55.50%	敗北
対戦相手 神河町(兵庫県)	12,292人	6,967人	<b>56.70%</b>	
<b>2015年</b> 藤崎町	15,596人	9,156人	<b>58.70%</b>	勝利
対戦相手 開成町(神奈川県)	16,814人	8,156人	48.50%	
<b>2016年</b> 藤崎町	15,452人	7,840人	50.70%	敗北
対戦相手 大井町(神奈川県)	17,280人	9,952人	<b>57.60%</b>	
<b>2017年</b> 藤崎町	15,282人	9,259人	<b>60.60%</b>	勝利
対戦相手 みやこ町(福岡県)	20,408人	14,995人	57.60%	

資料：笹川スポーツ財団HP

### ○大ノ里杯少年相撲大会

1960年(昭和35年)、葛野出身の名大関で、「相撲の神様」と呼ばれた大ノ里萬助の二十三回忌が行われ、鹿嶋神社に顕彰碑が建立されました。その時から「大ノ里会」が発足し、鹿嶋神社内の相撲場で「大ノ里杯少年相撲大会」が開催されていました。現在も「大ノ里杯争奪 藤崎町小学校相撲大会」として毎年8月上旬に常盤相撲場で相撲大会が開催されています。相撲大会は地域の相撲道の発展に大きく貢献し、この大会に出場した選手の中には、後の二代目若乃花などがおり、多くの名力士を育てています。

## 12. ゆかりの有名人

### ○あさり たかし浅利 崇

旧常盤村長をはじめ、数々の要職を務めた浅利崇は、旧常盤村の近代農業の土台を築き、「農業の父」「農業の師」と尊敬され、慕われる人物です。

浅利氏は1908年(明治41年)、合併前の旧常盤村の旧家である浅利家の長男として生まれました。1945年(昭和20年)、勤務していた東京の農地開発営団を退職し、郷に帰り1947年(昭和22年)、旧常盤村長に就任したのをはじめ、青森県議会議員等の要職を歴任、1993年(平成5年)85歳でこの世を去りました。

旧常盤村でかつて行われていた「有機の里」づくりは、浅利氏が唱え続けた「農業は原点にかえれ、土づくりがもっとも大切。米でもりんごでも野菜でも付加価値をつけなければだめだ」という信念と、斬新なアイデアが出発点となっています。当時の村民たちは、浅利氏に学ぶことで他町村より早く農業の知識を得ることができました。熱心に本を読み、研究を怠らなかった浅利氏。その愛読書11,000冊余が遺族によって寄贈され、「浅利文庫」として常盤ふるさと資料館あすかに収められています。その多くが農業に関する書籍で、「浅利文庫」は町民が自由に閲覧することができ、貸出しも行っています。

### ○おおのさと大ノ里

身長わずか164cm、体重97kgの小兵で大関となった大ノ里(本名:天内萬助)は、1892年(明治25年)に旧藤崎町の農家の三男として生まれました。幼少の頃から相撲が好きで、両親の反対を押し切って、1911年(明治44年)春に入門。大ノ里曰く「肉体と力には限界がある、しかし技には限界がない」と、敵の虚を突く独自の技をあみだし、努力と精進によって番付を駆け昇りました。大関昇進後には「相撲の神様」と呼ばれるようになり、その座を7年24場所も堅持しました。

その後、角界を根底から揺さぶる「春秋園事件」が勃発、相撲界の革命に身を投じていきま。協会を脱退した力士で結成した関西角力協会で大関を務め、1935年(昭和10年)に引退しました。引退後は大の里萬助として取締や頭取を務めましたが、関西角力協会が1937年(昭和12年)に解散すると、その苦労からか肋膜炎を患います。育て上げた愛弟子たちを協会に復帰させた後、翌年、大ノ里は、異境の地満州の大連で45年の劇的な生涯を閉じました。

稀代の名人大関の風格を賞し、藤崎の誉れとして鹿嶋神社に顕彰碑が建てられました。藤崎町では、毎年8月上旬に、大ノ里を目指した「大ノ里杯争奪 藤崎町小学校相撲大会」が開催され、熱闘が繰り広げられています。

## ○マスコットキャラクター

藤崎町のマスコットキャラクター、ふじ丸くんとジャン坊くを紹介します。

### ・ふじ丸くん

お誕生日	2012年7月1日
好きなもの	藤崎町のおいしいもの全部
特徴	羽が生えていること (でも飛べない)
将来の夢	友達をたくさんつくること



### ・ジャン坊くん

お誕生日	2012年7月1日
好きなもの	ツナマヨ (ジャン坊くんには 具が入っていないから)
特徴	湯気が出ていること (体の周りから飛び出している)
将来の夢	「藤崎町長に、オレはなる！」



## ○梅沢 富美男 (ふじりんごふるさと応援大使)

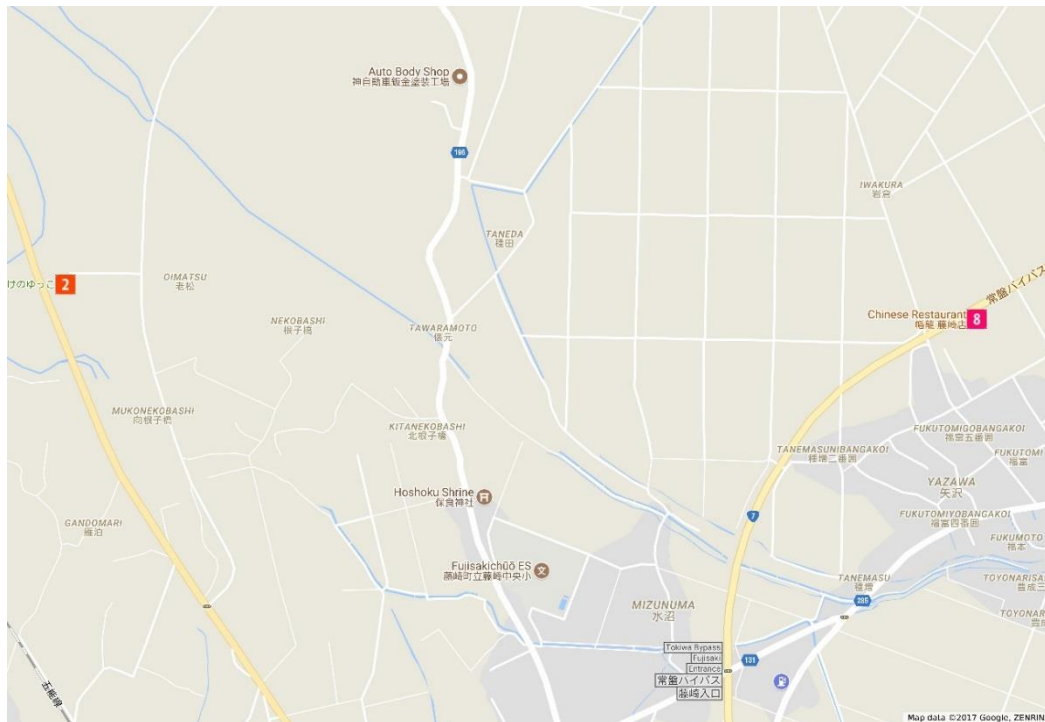
藤崎町は2013年(平成25年)5月12日、俳優の梅沢富美男氏に、「ふじりんごふるさと応援大使」を委嘱しました。委嘱状の贈呈式は2013年(平成25年)5月12日・母の日に、藤崎町文化センターにおいて、梅沢劇団の特別公演のなかで行われました。

梅沢氏の母、故・竹沢龍千代さんの故郷が藤崎町である縁で、大使委嘱を依頼。梅沢氏が快く承諾してくれたことから、ふじりんごふるさと応援大使を委嘱する運びとなりました。

俳優として全国を飛び回り、広く活躍されている梅沢氏には、藤崎町が発祥の地である生産量世界一のりんご「ふじ」をはじめ、藤崎町の魅力や情報を広く発信し、知名度向上など町の発展に貢献していただいています。



### 3 国道7号(矢沢地区)、国道339号沿線



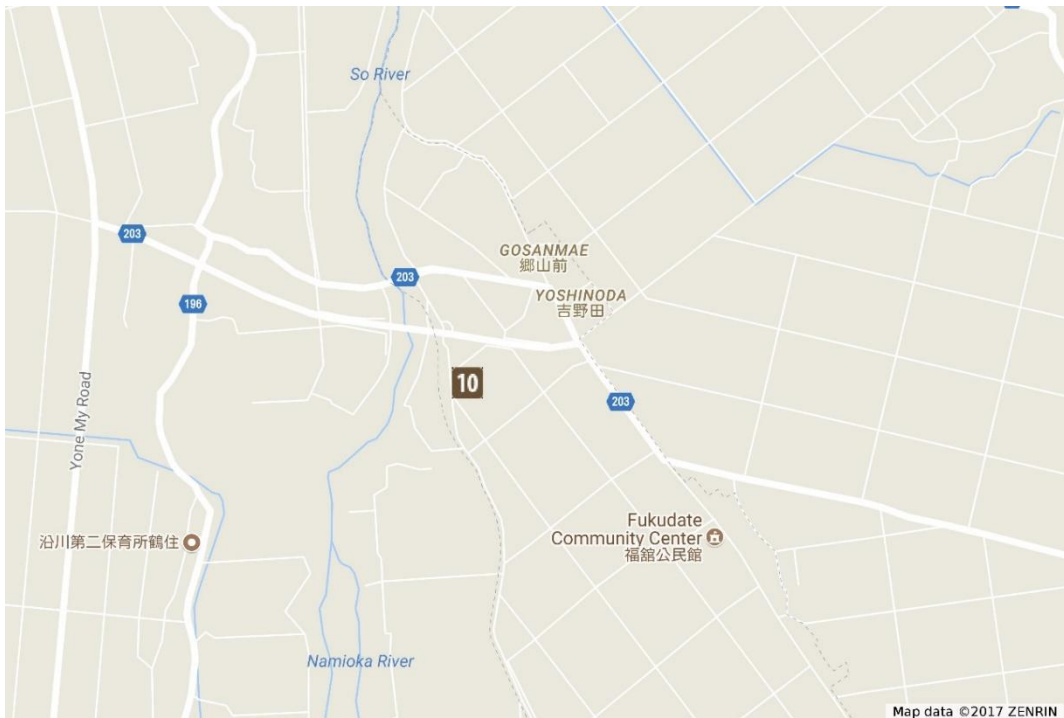
### 4 国道7号(常盤地区)沿線



## 5 JR北常盤駅周辺、県道285号(常盤地区)沿線



## 6 福館地区



○観光施設

<b>1</b>	常盤ふるさと資料館あすか	<b>2</b>	唐糸御前史跡公園
<b>3</b>	ふじ原木公園	<b>4</b>	みずべの学習広場
<b>5</b>	農産物直売施設 ふじの里	<b>6</b>	食彩ときわ館

○歴史

<b>1</b>	藤崎城址(安東氏発祥の地)	<b>2</b>	鷹待場跡
<b>3</b>	農林省試験場跡	<b>4</b>	藤崎八幡宮
<b>5</b>	鹿嶋神社	<b>6</b>	堰神社
<b>7</b>	徳下八幡宮・イチイの古木	<b>8</b>	水木城跡
<b>9</b>	日本基督教団藤崎教会	<b>10</b>	赤沼

○グルメ

<b>1</b>	麺房十兵衛藤崎店	<b>2</b>	焼肉五苑 藤崎店
<b>3</b>	太郎寿し	<b>4</b>	珈琲こすもす
<b>5</b>	アントルメ佐藤菓子店	<b>6</b>	きくち覚誠堂
<b>7</b>	ブルーランジェリー・ル・ボヌール	<b>8</b>	中華料理 幡龍 藤崎店
<b>9</b>	津軽路蕎麦処 そばの矢車	<b>10</b>	宝来軒
<b>11</b>	ラーメンカフェきたときわ	<b>12</b>	ニューラーメンショップ 常盤店
<b>13</b>	中華そば 我が家 藤崎店	<b>14</b>	ときわ屋食堂
<b>15</b>	居酒屋えびす	<b>16</b>	イシザワ菓子舗
<b>17</b>	佐藤長 常盤店	<b>18</b>	トキワ養鶏

○温泉

<b>1</b>	喜龍温泉 玉乃湯	<b>2</b>	はたけのゆっこ
<b>3</b>	藤崎町常盤老人福祉センター ときわ温泉	<b>4</b>	藤崎老人福祉センター 西豊田温泉

## 参考文献

- 『藤崎町勢要覧』藤崎町企画課、藤崎町、2008年
- 『藤崎町誌 第1巻～第4巻』藤崎町誌編さん委員会編、藤崎町、1996年
- 『常盤村史 通史編1』常盤村史編さん委員会、常盤村、2003年
- 『常盤村史略年表』常盤村教育委員会、常盤村文化財審議会、常盤村、1989年
- 『図説 弘前・黒石・中南津軽の歴史』長谷川成一 監修、株式会社郷土出版社、2006年
- 『リンゴの歩んだ道；明治から現代へ 世界の“ふじ”が生まれるまで』富士田金輔、農山漁村文化協会、2012年
- 『ふるさとの史跡散歩 藤崎町』小笠原睦男編、藤崎町郷土史会、2007年
- 『藤崎町 観光ガイドブック』藤崎町企画財政課、2014年
- 『ふじさきまち歩きガイドブック；ようこそとっておきの藤崎町へ』藤崎町企画財政課、2015年
- 『青森県藤崎町タウンガイドブック 2016』藤崎町企画財政課、2016年
- 『平成27年度版 青森りんご』青森県農林水産部りんご果樹課、2016年。
- 『岩木川流域 みずべの学習ひろば』国土交通省東北地方整備局 青森河川国道事務所調査第一課、2000年

藤崎町役場

<http://www.town.fujisaki.lg.jp/>

藤崎町観光情報サイト「ふじさんぽ」

<http://www.fujisaki-kanko.jp/>

青森県庁

<http://www.pref.aomori.lg.jp/>

青森のうまいものたち

<http://www.umai-aomori.jp/>

藤崎町商工会

<http://www.fujisaki-sci.com/>

「紅の夢」公式ホームページ

<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/kurenainoyume/>

青天の霹靂ホームページ

<http://seitennohekireki.jp/>

笹川スポーツ財団ホームページ

<http://www.ssf.or.jp/>